

目次

序章 日本がモデルとしたヨーロッパ近代とは何であったか…………… 1

第一章 なぜ日本に政党政治が成立したのか…………… 35

1 政党政治成立をめぐる問い 36

2 幕藩体制の権力抑制均衡メカニズム 42

3 「文芸的公共性」の成立——森鷗外の「史伝」の意味 50

4 幕末の危機下の権力分立論と議會制論 59

5 明治憲法下の権力分立制と議會制の政治的帰結 66

6 体制統合の主体としての藩閥と政党 71

7 アメリカと対比して見た日本の政党政治 75

8 政党政治の終わりと「立憲的独裁」 78

第二章 なぜ日本に資本主義が形成されたのか……………81

1 自立的資本主義化への道 82

2 自立的資本主義の四つの条件 86

(1) 政府主導の「殖産興業」政策の実験 86

(2) 国家資本の源泉としての租税制度の確立 95

(3) 資本主義を担う労働力の育成 99

(4) 対外平和の確保 106

3 自立的資本主義の財政路線 116

4 日清戦争と自立的資本主義からの転換 124

5 日露戦争と国際的資本主義への決定的転化 127

6 国際的資本主義のリーダーの登場 131

7 国際的資本主義の没落 139

第三章 日本はなぜ、いかにして植民地帝国となったのか……………143

1 植民地帝国へ踏み出す日本 144

2 日本はなぜ植民地帝国となったか 149

	3	日本はいかに植民地帝国を形成したのか	154
	(1)	日露戦争後——朝鮮と関東租借地の統治体制の形成	156
	(2)	大正前半期——主導権確立を目指す陸軍	166
	(3)	大正後半期——朝鮮の三・一独立運動とそれへの対応	173
	4	新しい国際秩序イデオロギーとしての「地域主義」	190
	(1)	一九三〇年代——「帝国主義」に代わる「地域主義」の台頭	192
	(2)	太平洋戦争後——米国の「地域主義」構想とその後	198
第四章		日本の近代にとって天皇制とは何であつたか………	205
1		日本の近代を貫く機能主義的思考様式	206
2		キリスト教の機能的等価物としての天皇制	213
3		ドイツ皇帝と大日本帝国天皇	219
4		「教育勅語」はいかに作られたのか	225
5		多数者の論理と少数者の論理	241

終章 近代の歩みから考える日本の将来……………247

- 1 日本の近代の何を問題としたのか 248
- 2 日本の近代はどこに至ったのか 252
- 3 多国籍秩序の遺産をいかに生かすか 257

あとがき 267

人名索引

*原文の片仮名表記は平仮名表記としたものがある。
また適宜句読点を加えた。

序章

日本がモデルとしたヨーロッパ近代とは
何であつたか

近代日本のモデル

日本の近代は、日本が国民国家の建設に着手した一九世紀後半の最先進国であった。ヨーロッパ列強をモデルとして形成されました。当時ヨーロッパでも、カー・マルクスが『資本論』第一巻の第一版序文に述べているように、「産業的により発達している国は、発達程度のより低い国に対して、その国自身の未来の像を示す」という見解が一般的でした。後進国にとって、ヨーロッパ化は正負両面において不可避と考えられていたのです。「国民は他の国民から学ぶべきものであるし、また学びうるものである」とマルクスが述べた所以はそこにありました。それから一世紀以上を経て、一九七〇年代半ばに唱えられたウォーラーズテインらの「世界システム」論などの原型は、既に一九世紀の七〇年代における世界資本主義の「中心」(center)であったヨーロッパの自己認識の中に胚胎していたように思われます。

一八七一(明治四)年から七三年にかけて、岩倉具視いわくらしむのみを特命全權大使とする政府使節団が不平等条約改正交渉のために欧米に派遣されました。彼らは外交交渉よりも欧米から学ぶという目的意識をもって海を渡ったのです。岩倉使節団が最初に訪問した米国は、他の西洋諸国の先頭

に立つて、日本に対して「開国」を強制する圧力、いわゆるウエスタン・イムパクトを加えましたが、当時日本の目から見ても米国はヨーロッパ諸国と必ずしも一体ではなく、むしろそれから区別される後進国に属し、その意味では日本と同等でした。しかし米国は日本に先がけて、ヨーロッパの母国である英国からの独立を勝ち取り、さらにヨーロッパ諸国と同等に日本に対して不平等条約のもたらす権益を享受していました。現に幕末の日本で世界情勢に通じていた一部の知識人からは、米国は「攘夷」の成功的事例とさえ見られていましたし、非ヨーロッパ国家としてヨーロッパ的近代化の先行的事例を提供していたのです。

日本の近代化の過程において、米国が日本に対して及ぼした独自の強い政治的文化的影響の歴史的根拠はそこにありました。日本のヨーロッパ化は、アメリカ化と不可分でしたし、そうであるのみならず、世界の中心がヨーロッパからアメリカに移るにしたがって、日本にとってヨーロッパ化はアメリカ化に転化する必然性をもっていたのです。

日本が国家形成を具体的な目標に据えて、ヨーロッパを最適モデルとする近代化を開始した一九世紀後半の幕末維新期においては、ヨーロッパでは自分たちの歴史的経験としての「近代」について理論的な省察が始まっていました。そこから、「近代とは何であったか」という問題意識から生じた「近代」概念の萌芽も見られました。ここでは、その典型的な事例として、

一九世紀後半に活動した英国のジャーナリストであるウォルター・バジヨット（一八二六～一八七七年）の試みた考察を検討します。それが本書の課題、「日本の近代とは何であったか」という問いに答える一つの手掛りを与えてくれるからです。

バジヨットはカール・マルクスと同時代人です。マルクスの『資本論』第一巻が出版されたのと同じ年の一八六七年に代表作『英国の国家構造』(*The English Constitution*)を刊行しています。二人はともにジャーナリズムに携わり、ともに政治

経済学的観点から英国近代を分析しました。両者とも、政治と経済を相互に密接に関連させて議論しました。マルクスの政治分析はその経済理論と不可分（あるいは両者を不可分とする哲学や世界観から発したものでしたし、バジヨットが英国金融市場を分析した成果である『ロンドン・ストリート』(一八七三年)は、英国政治体制を分析した『英国の国家構造』と対を成すものでした。またマルクスもバジヨットも、自然科学の勃興に触発され、物理学や生物進化論をモデルとして、既成の政治学や経済学を批判しながら、一九世紀後半の英国に最も先端的に体现された近代の現実を説明しうる新しい学問の確立を目指しました。

マルクスは「経済学批判」としての『資本論』において、物理学者が自然過程を観察する方法にならって、「経済的な社会構造の発展を自然史的過程として理解しようとする」立場をと

りました。そして資本主義的生産様式やそれに相応する生産関係・流通関係が最も典型的に形成された英国を、「自然過程が最も確かな形態で、攪乱的影響によつて混濁されることが最も少なく現われる場合」に相当するとして、理論を展開するために引照する主要な基準としました。

他方、バジヨットは同時代の現実を「鉄道や電信の発明」、すなわち交通通信手段の革命的变化がもたらした「新世界」として認識し、同時に「思想の新世界が目には見えないけれども、空中に存在し、われわれに影響を及ぼしている」と見ました。そして「新しい思想が二つの古い科学、政治学と経済学を変えつつある」と洞察しました。ヨーロッパ近代がその客観的な把握を可能にするような明確な特色を現わしつつあつた状況において、マルクスがそれに適合する新しい経済学を追求したように、バジヨットもまた同じ目的意識をもつて新しい政治学を模索したのです。

自然科学と
いうモデル

バジヨットが新しい政治学のモデルとしたのは、マルクスと同様に、「近代」の最も顕著な徴表である自然科学でした。バジヨットはそれを広

義の「物理科学」(physical science または physics)と呼びます。



ウォルター・バジヨット

バジヨットによれば、それは「外的自然の細部にわたる系統的的研究」を意味し、「自然学」(a study of nature)といいかえてもよいものでした。「確立された自然学を新しい道具や新しい事物の発見のための基礎として利用しようという考えは、初期の人類社会には存在しなかったものであり、それは未だに少数のヨーロッパ諸国に特有の近代的観念なのである」とバジヨットは述べています。古代最高の知識人ソクラテスは、自然学が不確実性を生み、人間の幸福を増進しないという理由で、反自然学的であつたとバジヨットは考えました。バジヨットにとつては、「自然学」が知的世界における「近代」と「前近代」とを分かつ最大の指標であつたのです。

こうして「自然学」は、バジヨットによれば、一八世紀のニュートン、一九世紀のダーウインに象徴される物理的・生物的・自然的自然についての画期的理論によつて「近代」を開きました。このような「自然学」が担つた役割を、「政治的自然」(political nature)、すなわち「外的自然」に對峙する内的自然、いいかえれば「人間的自然」(human nature)を対象とする政治学において担うことを期したのが、バジヨットの『自然学と政治学』(*Physics and Politics, New Edition, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd., 1872*)でした。それは政治学における「自然学」的次元を開き、「政治的自然」を強化し、発展させる力としての「自由」に基づく政治、すなわち「議論による統治」(government by discussion)の確立を目的とするものでした。それがバジヨットの最も基本的な

「近代」概念です。この著書の副題は「政治社会に対する（自然淘汰）と（遺伝）の原則の適用に関する考察」(Thoughts on the application of the principles of 'natural selection' and 'inheritance' to political society)です。この副題に見られるように、バジヨットには「自然学」の分野でダーウィンが開発した進化論の概念によって政治的進化、つまり近代化を説明しようとする意図がありましたし、実際にそうした試行が同書に見られないわけではありません。しかし、それよりも「近代」の道標となった「自然学」に対応する「政治学」独自のパラダイムを提示することがバジヨットの目的であったように思います。

なお丸山眞男によれば、日本において「近代」を特徴づける中核的学問領域を「(数学的)物理学」とみなし、これを旧体制における正統的学問である「倫理学」と対極に位置づけたのは、福沢諭吉でありました。これが丸山のいう「福沢に於ける「実学」の転回」(一九四七年)という命題であります(『丸山眞男集』第三巻、岩波書店、一九九五年所収)。これは、まさにバジヨットが『自然学と政治学』において打ち出した命題と基本的に同一であります。福沢は『自然学と政治学』を深く読みこんでいたのかもしれませんが。

二人の「近代」
このようにマルクスとバジヨットとはともに「自然学」を最も典型的な「近代」の学問とみなし、それをモデルとして、「近代」の最も先端的な現実を体現して

いる英国近代の歴史的事例を主要な素材としながら、政治学や経済学における「近代」を模索しました。しかし二人の「近代」概念は著しく異なっていました。両者はともに政治と経済との関係を重視しながらも、バジヨットは英国の国家構造を実際に機能させる「実践的部分」の中核としての政党内閣の出現に英国近代の歴史的意味を見出したのに対して、マルクスは商品とその価値の分析を通して抽出した資本の論理によって「近代」を説明しようとしてきました。つまり、バジヨットは政治体制の変化に重点を置いた「近代」概念を提示し、マルクスは資本主義の成立に重点を置いた「近代」概念を提示したといえるでしょう。

また、マルクスは商品化された労働力の主体であるプロレタリアートの政治的能動性を重視し、「近代」の資本主義的生産様式の次に到来すべき「近代」後の新しい生産様式とそれに相応する社会を形成する主導的役割をプロレタリアートに期待しました。これに対して、バジヨットは伝統的な議会制の下で出現した政党を基盤とする「内閣」(The Cabinet)による政治的能動性の集中を重視し、それを支持し補完する要因として、体制への畏敬と恭順とを喚起する体制の「尊厳的部分」(女王や上院)の役割とそれによって涵養される被統治者の政治的受動性に意味を認めました。バジヨットの「近代」概念は、後にも述べるように、「議論による統治」を成り立たせる要因として、迅速な行動性よりも、これを緩和し、鎮静させる熟慮を求める

「受動性」を重視しています。

バジヨットの「近代」概念とはいかなるものであったのかをその歴史的由来について、より深く掘り下げてみます。バジヨットの「近代」概念にとって重要なのは、近代

「前近代」との関係でした。バジヨットの場合、「近代」と「前近代」との間には断絶と連続とがありました。「近代」は「前近代」を否定し、それから断絶することによって成立すると同時に、「前近代」のある要素を蘇らせることによつて出現すると説明するのです。

「近代」から断絶される「前近代」の要素とは、固有の「慣習の支配」です。それは「近代」を特徴づける「議論による統治」とは相容れません。ただ、「前近代」にも、古代ギリシャに見られるように、「慣習の支配」と対立する「議論による統治」の先駆的形態が形成されていました。バジヨットによれば、ヘロドトスにおいて、すでに「議論の時代」(the age of discussion)が始まっていました。ヘロドトスは同時代のギリシャの中で、「果てしない政治的議論を聞いていたに違いない」とバジヨットは指摘します。「その著書には抽象的な政治論の多くの萌芽的な痕跡が見られる」というのがバジヨットの観察です。トゥキディデスになると、議論の成果はそれまでにないほどに結実しています。プラトンやアリストテレスのような最高の哲学者たちが書いた書物のあらゆるページには、彼らが生きた「議論の時代」が豊かに消しがた

く跡をとどめています。少なくとも彼らに対しては「前近代」を貫く「慣習の支配」は全面的に破壊されていたのです。

そのような「前近代」における「議論による統治」の伝統は、アテネに代表される古代ギリシャの他にも古代ローマ、中世イタリア諸共和国、封建ヨーロッパの諸共同体や身分議会にも共有され、特別な影響力をもっていました。それらはそれぞれの影響力をそれらのもつ「自由」に負っていました。そこではのちに国家に集中することになる「主権的権力」(sovereign power)が分割されており、各権力主体の間で議論が行われていたのです。それはバジヨットによれば、政体の如何とは関係なく「自由国家」(free state)というべきものでした。それが「近代」における「議論による統治」を生み出す「自由」と歴史的に連続していたのです。その意味でヨーロッパにおいては、古代史や中世史は近代史の一部でもあつたということでしょう。

もつとも同じヨーロッパの政治的伝統を前提としながら、バジヨットとは逆に、主権の本質的な不可分性を強力に主張した論者もいました。バジヨットの『自然学と政治学』よりも一〇〇年以上先立って、一七六二年に『社会契約論』を刊行したジャン＝ジャック・ルソーです。

その中でルソーは、国家が多くの都市を含む場合にも主権は単一であり、それを分割すれば破壊せざるをえないと主張しました(『社会契約論』 桑原武夫・前川貞次郎訳、岩波文庫、第三編第一三